

かずきの博物誌

タカブシギ

～休耕ハス田で
せっせとエサを探る～

文・写真／成田篤彦



©成田篤彦

余裕ができたなら「是非、やってみたい」と思っていたのが、野鳥の撮影。4年前の冬、望みかなって、デジタルカメラと望遠レンズをそろえて撮りに行った。場所はベテランカメラマンから紹介された海岸近くの湿地帯。市街地の曲がりくねった細い道を抜けると水田やハス田やアシ原が広がっていた。泥水がハス田の畦からあふれるほど溜まっていた。そこで、農家の方が腰まで浸かって、正月用のレンコンを収穫していた。舗装道路わきのハス田に一羽のツグミ大のシギがいた。首が細長く脚も長くスマートに見えた。腹は白いが、背は艶のあるチョコレート色で白い斑点が際立っていた。タカブシギだ。ちなみに、この背の模様がタカに似ているので、タカブシギ（鷹斑鷗）の名がついた。

タカブシギ チドリ目シギ科 体長約21cm。旅鳥。
上総では主に秋に見られる。=2008年2月14日 木更津市
(成田篤彦撮影)



©成田篤彦

ハス田を飛ぶタカブシギ
腰が白い。尾の黒い斑紋は目立たない。脚が尾を超える
=2007年11月4日 木更津市(成田篤彦撮影)

水面を抜き足差し足のような格好で、素早く歩きまわり、泥水にくちばしを差し込んでいた。そして、線虫のような虫やヨコエビのなかまなどのエサをつまみ出す。口元までくちばしを差し込む時は眼をつぶる。このしぐさは眼が汚れるのを避けるためだろうか？ 彼？の目の道路でカメラを構えていても全く気に留めないでエサをついばんでいる。おかげで思う存分シャッターを切ることができた。

一昨年の秋は数羽の群れが畦に沿って泥水に浸かりながらエサをついばんでいた。その時、1羽が甲高い澄んだ声で「ピッピッ、ピッピッ」と短く鳴き、飛び去った。すると外のシギも一斉に飛び立った。白い腰と尾羽から突き出る長い黄色の脚が目立った。

昨年は干上がった湿地でミズを泥中から引っぱり出していた。しかし、時には畦やアシの生える休耕田で居眠りする姿も見られた。それにしてこの忙しげにエサを探す様子を見ていると「長旅でよほどお腹が空いているのだろう」と思った。また、この湿地がエサになる小動物がとても豊富で、彼らには絶好のオアシスに違いないと感じた。

上総の冬空は真っ青で空気が澄んでいる。濁った水面に空の色が反射し、このシギの艶のある暗褐色と白紋が水面に映り、清々しい一枚の絵のように見えた。



©成田篤彦

休息中のタカブシギ
休耕水田で居眠り=2007年11月4日 木更津市(成田篤彦撮影)

さて、日本ではこのシギは主に春と秋に通過する旅鳥で、一部は越冬する。数羽から数十羽の群れが主に水田、休耕田、川岸などの内陸の湿地で見られる。干潟に現れることもあるが、広い干潟では見られない。彼らはゴミムシやガガンボ、ミズアブ、トビケラ、オサムシ、シデムシ、ミズスマシなどの昆虫類やその幼虫、ミミズ類、小型の貝類、小さなエビ類などの小動物を食べている。また、警戒心や群れる性質が強いという。ユーラシア大陸の亜寒帯から寒帯の針葉樹近くの湿地で広く繁殖する。千葉県の新浜で1960年代には約600羽も訪れたことがあるが、今は住宅地となり渡来しないという。

上総では秋に多く見られるが、この湿地帯では数羽の群れしか見えない。越冬している可能性も高いが、その数はきわめて少ない。

ところで、この湿地の周辺の大木にはオオタカやノスリが潜んでいる。ハヤブサやチュウヒも冬期には現れ、水鳥たちを襲う。これらのタカなどに襲われなくて十分に栄養をつけて旅立ってほしい。そして、できれば大きな群になっていつまでもこの湿地を訪れることを望んでいる。

〈参考文献〉

○千葉県2002『千葉県の自然誌本編7 千葉県の動物2・海の動物』、山溪カラー名鑑『日本の野鳥』山と溪谷社。